ものづくりを通して

社会福祉学部社会福祉学科２年　安田　正輝
活動先：NPO 法人　あかり
ゼミ：松下　典子　先生

私たちは２つの企画を考えていた。ひとつは「竹で水鉄砲を作ろう」もうひとつは「鬼まんじゅうを作ろう」いずれも物作りを通してコミュニケーションを取るという企画だった。まずは前者について。

対象としたのは地域の小学生。ビラを自分たちで作り、あかりの広報に同封させていただいた。結局募集で集まったのは親子６人。それに子ども園の園児がたくさん。段取りとは全く違う進行になった。子ども園はあかりの建物と隣接し、交流もよくあるということで、こちらからお願いして参加してもらった。私たちは子ども園の都合もあるだろうと思い、予定など交渉にいった際に、子ども園の予定に合わせることになった。しかし、予想外に一斉に押し寄せる子どもたち。このときの反省点としては、向こうの都合に合わせることも大切だが、自分たちの意見も相手にしっかりと伝えないと両者があわてる事になってしまうということ。結局、子ども園の対応をしている間、募集で集まった方をほったらかしにしてしまっていた。本当に申し訳なかったと思う。また、水鉄砲に使った生地がうまく吸水せずに、満足した水鉄砲ができなかった。１本でもしっかりと飛ぶ水鉄砲を用意しておくできだったと思う。

水鉄砲の企画はトータルで考えたら失敗の要素が多い企画だった。まず、募集をしても思ったように集まらないという現実があった。一見、ビラを作ってしまえば簡単に集まりそうだが、その情報を地域に伝える手段が無かった。NPO 法人の情報発信能力が弱いという部分も身をもって体験した。

次に「鬼まんじゅう」の企画。これはデイサービス利用者を対象として行った。NPO 法人あかりは建物が二つあり、水鉄砲を行ったほうが「きらり」という建物。道路を挟み「あかり」がある。鬼まんじゅうの企画はそれぞれで計２回行った。

私たちは、昔食べていたお菓子は何かということをテーマにして利用者の方とお話をした。「戦後だったからお菓子は何も食べ無かったよ」だとか「母親に作ってもらったことをよく覚えている」という声が聞こえた。昔の事を思い出すことは「回想法」として認知症の予防などにもなる。スタッフの方は利用者同士の話を促していたが、私たちが話すとどうしても１対１の関係になりがちであった。また友達同士で話すわけではないので、若干

ぎこちない会話になってしまっていたように思う。その後、最初から予測していた「鬼まんじゅう」に決まり、レシピを調べた。ここでひとつ反省点。レシピを作るときは全部自分たちで調べて手早く作ってしまったが、これも利用者さんと一緒に作業することが出来たのではないかと反省している。

１回目の実践は「きらり」のデイサービスで行った。利用者さんに材料を切ってもらい粉は振るってそれぞれができることをしてもらった。包丁の扱いは危険なのではないかと思っていたが、スタッフの方によると、包丁などは昔から使い慣れているから心配する事はないとのことだった。たしかに、見ていて不安が無い切方だった。私がやるほうが逆に不安を与えるかもしれない。１回目の実践が終わり、その日のうちに反省会をした。

２回目の実践は１回目の反省を踏まえてスムーズに行うことができた。作っている中で「塩」を入れるとよりおいしいという昔の知恵を教わり急遽「塩」を追加。また、作り方一つにしてもそれぞれの家庭によって個性があることがわかった。デイで何かをするときは利用者さんそれぞれに役割をもって参加してもらうことが大切であることがわかった。

サービスラーニングの中で最も心に残っている言葉は「思い通りに行かないことをいかに楽しむか」ということだ。これはスタッフの方がおっしゃったことだが、現場では毎日楽しい日々を過ごしているが毎日うまく行くわけではない。「すこし違っても別にいいじゃん」くらいの気持ちだと思い通りに行かないときでも逆にそれが楽しさになるとおっしゃっていた。確かにそうだ。水鉄砲の企画でも必死になってきれいに完成することにばかりに意識がいって、本来の楽しむという事を忘れていたように思う。

またあかりでは利用者さんひとりひとりが役割をもっていると感じた。あかりはみんなで一緒に楽しむという空間であり、そこにみんなの人のあたたかさがあるということをサービスラーニングの６日間で十分に知る事ができた。準備期間から実践の６日間、全てを通してメンバーの個性を最大限に活かすことが出来たと思う。NPO というのはそもそも、そういう個性が活きる場ではないだろうか。そういう場であるからこそ、おのずと個性が発揮され、結果的によい６日間のサービスラーニングになったと思う。